採　用

有森信二

大会議場が、面接を受ける二十二人の控え室だった。

僕は十八番目に済み、後に四人が控えていた。最後の二十二番目の女性が上気した表情で戻って来て約三十分が過ぎた頃、担当係員らしい人事の職員が入って来た。

「番号を読み上げられた人は、これからすぐに案内される部局に出向き、そこの責任者の最終面接を受けてください。採否の結果は、一週間後に必着の郵便で連絡します」

係員が十人ほどの番号を読み上げた。同時にドアが開き、部屋の外から「七番は工学部へ」との声があがる。

呼ばれた番号の者が荷物を持ち、部局と呼ばれる職場の担当者らしい者の後に従い出て行く。全員が出て行った後に、僕だけが残された。五分経ち、十分が過ぎた。係員が怪訝そうな表情を見せたので、「十八番は大丈夫ですか」と聞いた。係員は隣の部屋の電話に走り、顔を紅潮させながら戻って来た。

「十五分待ってもらえますか。迎えが来たら、一緒に移動してください」と言い残し、大急ぎで横のドアに消えた。

「見本林の者ですが」日に焼けた作業着姿の男が、大声を出した。腰には作業道具らしい金具を差したままである。

「玄関にトラックを停めとる。さっさと荷物を纏めろ」

男は、誰もいないと知ると物言いがぞんざいになった。

玄関には軽トラックが停めてあり、荷台には輪切りにした太い木の根が五つばかり転がっていた。「荷物は荷台に乗せろ」と男が言うので、ショルダーバッグを乗せた。

助手席に乗り込むと、「今度の新人かい」とロータリーを鋭角に回りながら言うものだから、フロントガラスにつんのめりそうになり、「部局の面接に合格しないと駄目だそうですが」とエンジン音に負けないように答える。男は微かに鼻先を蠢かし、「とばすぞ。七分だ」と言った。

見本林という部署は、面接を受けた大学本部から最も遠いキャンパスの端になるのだという。

「頑張りなよ」男は茶瓦の古めかしい木造平屋建ての前でトラックを急停車させると、玄関の方を顎でしゃくった。

赤煉瓦やロータリーのある建物を途中に眺めながら、大学の構内は広く、建物はさすがに重厚な雰囲気を醸しているのだと感心したのだが、工場の建物やグランドを抜け、空き地を越え、果てた先が見本林という部局らしかった。

玄関を入ると、右手に事務室らしい部屋があり、左手には会議室、教授室、助教授室などという名札が掛けられていた。どの部屋もかなり年期が入っていて、塗りは剥がれ、廊下は歩く度に撓んだ。それに、ストーブの煙の臭いが建物内に籠もっていて、噎せ返りそうだった。

手前の事務室のドアを押すと、鈍い軋み音とともにドアが半分ほど開いた。部屋の隅の中年の女性がゆっくり腰を上げ、先に立って歩いて、教授室の部屋をノックした。

教授室には三人が居た。「到着しました」と女性は報告し、「終わったら事務室に寄ること」と言って下がった。

「木には登れるか。五、六メートルぐらいだが」

三人の中心に座った教授らしい禿頭の男が、いきなり聞いてきた。僕は意味が掴めないので、「駄目です。五歳の頃、柿の木に登ろうとして落ちてしまいました。それっきり、高いところは大の苦手です」と答えてしまった。

教授は手元の紙に何か印を付け、「じゃ、雑草刈りなどは大丈夫か」と次の問いを投げてきた。僕の眉は、怪訝な形に歪んだ筈だ。僕は事務職員として受験したのである。

「うちが欲しいのは、技術職員だ。本部の人事にはそう届けている」と、右端の事務長と名乗る猪に似た風貌の男が口を挟み、急いで部屋を出て行った。

「君の履歴書によると、技術も技能も関係なさそうだな」

「出来るだけ、心臓の負担にならない仕事を希望します」

事務長が戻り、「うちが出した書類は間違いないので、人事に問い合わせてきました。人事が抗弁します。見本林からの希望は事務職員となっていると言い張ります。駄目な場合は断ってもらえばいい、とのことですが」と普通の声で話すものだから、僕にも事情が飲み込めてしまった。

腕組みをしたのは、三人の面接者の方だ。僕を退室させることもせず、Yを右に、Tを左にというふうに紙片に描いたりしていたが、事務長がまた部屋を出た。

事務長が戻ると、今度は内緒話になった。「取り引きは成立なのか。それは重畳」と言い合い、頷き合った。

ウホンと教授が咳払いし、「では、君は庶務という事務だったら大丈夫か」と聞いたので、「よろしくお願いします」と答えると、間を置かず「見本林の懸案が一つ片付くことになった」と事務長が満足そうに言った。

「玉田君、来月一日付で庶務係の臨時任用を免じ、本来の技術職に正式任用する。君の今の席には、新人の山本君が座る。今、人事と直に交渉して来た。チャンスは四十歳というところに転がっていた。わからんもんだなあ」

玉田と呼ばれたのは、僕を迎えに来てくれた作業着の男で、事務長の言葉に、直角になるほど慌てて頭を下げた。

「バッグを荷台に乗せたままだ。最初から手え掛かる野郎だ。このバッグ、本部と見本林を三度も往復したぜ」

玉田が、僕の机の前にドンとバッグを放った。

了